

2019 年度火山性流体討論会実施報告

この度、日本地球化学会「鳥居・井上基金」の助成を受けて、2019 年度火山性流体討論会を開催しましたので報告します。火山性流体討論会は、年に1度開催されており、火山性流体（火山ガス・熱水・マグマ・超臨界流体・地下水など）を対象とした地球化学やその周辺分野の研究を行っている学生や若手研究者が、それぞれの研究について時間をかけて討論する場です。そのため、研究発表については、1人当たりの時間を長くとり、話題提供中でも随時質問を受け付けるセミナー形式を採用しています。毎年、2泊3日の合宿形式で行われています。

本年度の討論会は、栃木県那須郡にある研修施設「なす高原自然の家」で、10月18日～20日の日程で行いました。参加者について、学生が15名、若手研究者が6名、中堅以上の研究者が4名、会社員が2名の総勢27名（うち、地球化学会員は8名）でした。また、学生の中には北海道、山形、福岡といった遠方からの参加もありました。研究発表について、口頭で13件、ポスター形式で6件が行われました。

今年度も発表の多くは地球化学的研究でした。活動的火山(草津白根山、霧島火山群、箱根など)の火山ガスや温泉水の化学組成・同位体組成を用いた火山活動度の推定及び火山熱水系についての研究や、変成岩や火山岩などに含まれる流体包有物の化学組成を用いた地下深部での流体活動についての研究などがありました。この他、放射性炭素年代測定についての解説などのレビュー的な発表もありました。また、地球化学以外にも、蔵王火山における噴出物の岩石学的研究、草津白根山周辺の地下構造についての電磁気学的研究、新燃岳の火山灰を用いた記載岩石学的研究、せん断流中の気泡の合体条件に関するシミュレーションなど様々な研究発表がありました。このように、アプローチや研究対象は多少違えど、主として火山性流体についての研究であるため、参加者からは多くの質疑があり、活発な議論が起こっていました。ほとんど全ての発表が1時間を超えるものとなりました。発表後も個別に討論がなされており、深夜まで続いていました。特に、学生や若手研究者にとって、自身の研究についての改善点を認識し、理解を深める良い機会になったと感じています。

巡検として、茶臼岳の噴気においてガス採取の見学を行いました。10月中旬ということもあり、山は風が強くなり肌寒く感じました。火山ガスの採取法について、気象庁気象研究所の谷口研究官に説明を交えながら実演をしていただきました。参加者は、噴気でのガス採取の様子を写真に撮ったり、使用されている試薬や器具に施された工夫についてメモを取るなど熱心に見学していました。火山ガス採取の様子は、ほとんどの参加者にとって初見であり、良い機会になったのではないかと思います。

最後に、日本地球化学会の鳥居・井上基金は、遠方からの参加学生の交通費補助に使用させていただきました。参加者や宿泊施設の職員など多くの方々の多岐にわたるご協力があった、2019 年度火山性流体討論会が開催できたことを、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

外山浩太郎（東京大学 大学院総合文化研究科）



写真① 集合写真 「なす高原自然の家」のロビーにて



写真② 口頭発表の様子



写真③ ポスター発表の様子